〔千葉医会誌 47, 357, 1971〕

# 〔編 集 後 記〕

◇ 巻頭から講座まで，解剖・薬理・生化学・生理の4先生が並べられたところからみてもおわかりのように，本号は「脳と神経の研究・特集」です。

大谷先生は趣味となさる囲碁の定石からはじまって，小川鼎三先生の言葉を引かれて医学が定石のない定石をもつ学問であることを訓されています。村山先生は従来の脳性固縮と全く異なった成因による，貧血性脊髄性固縮をネコにおいて作られた，ご自身の代表的業績のひとつを中心としてまとめられています。

三浦先生は生化学と生体機能の結びつきにおいて，現在最も注目を浴びている Cyclic AMP について，その歴史から新たな展開までを，実にわかりやすく review されました。辰濃先生の講座は英文ですが，電気麻酔—その機構についての基礎的研究で，まだなお幼時期にあるといわれるこの方面の研究が，基礎のみならず臨床において将来大いに貢献しうることを，明快な文章で説かれています。

◇ 原著の方もこれに対応するように，脳と神経の障害と修復という面にしぼってご投稿いただきました。これは毎年一度の特集を予定していて下さる，他のテーマの研究者の方々には申しわけがなかったのですが，多少とも特集という性格を出してみたかったからです。内容的には①神経内科学的研究，②脳外科学的研究，③実験的脳障害に関する研究のみっつに分けました。

①では脊髄機能を緊張性振動反射のH波の面から検討したもの，および運動ニューロンプール活動曲線を中心として行なったもののふたつ，ならびに頭部外傷後遺症を脳波所見と愁訴の関係から分析したものの計3論文，②では小児重症脳挫傷，側脳室内出血をともなう硬膜外血腫の処置などについて，あらたに本学に誕生した脳神経外科からの2論文，③では薬物による脳・神経の障害，凍結・加熱障害など，臨床・基礎両面からの3論文，計8論文が掲載されました。

明年度もまたこの特集があるとすれば，“自律神経をめぐる基礎と臨床”といったようなテーマで計画されることになりそうです。

◇ 本誌として特集を企てることは，実施上きわめて困難であることは体験を通じて十々承知しておりますが，本学内にアレルギー懇話会，移植に関する研究会，ホルモン同好会，電顕研究会等々がかなり定期的に行なわれていることであり，“脳と神経”でない特集も組めたら良いがという夢を，編集子はまだ棄て切れずにおります。

◇ 研究余話の「イルカの脳」は大学院生である著者が，伊豆の川奈で入手したアラリイルカの脳について記されたもので，“利口なイルカ”が脳解剖学的にみてかなり分化した脳をもつ動物であることを明らかにしてあります。診療のための検査は，今回は尿培養についてですが，はじめに尿路感染症というものが以前考えられていたより非常に多い疾患で，人生を通じてすべての年令層で発生し，起因菌には薬剤耐性のものが多く，経験的治療は抗生剤の乱用や感染症の慢性化を助長するのみであるなどと，コワイことが書かれていて，あまり関係のなさそうな筆者もつい全文を読まされてしまいました。

◇ セミナーはつい最近本学で講演されたチュルヒ教授の抄録をのせました。脳循環障害の病因，診断，処置についてのもので，これも本特集にふさわしいものと思い，原文のままお目にかけることにしました。もうひとつ，本学第一生理からゲッチンゲン大学に行かれ，教授になられた高野先生のゲッチンゲン便りも，かなり以前にご投稿のあったものですが，本特集のためにあたためておいて掲載させていただきました。

◇ 従来の企画のひとつであった“新しいくすり”はおいおいに“くるっふあっせん”などに移行する予定と申し上げておきましたが，本号のコリンエステラーゼ賦活薬，ベンゾジアゼピン誘導体などはまさにそれです。“さえら”は霊長類研究所の簡単なご紹介としましたが，これは“さえら”がヒトの紹介にかぎらないことの一例としたものです。“らいぶらりい”はまたまた基礎的な新著の紹介になりました。これも臨床の先生方のご協力によってレパートリーをひろげたいと思っています。これらの項へはあまり堅くお考えならずに——わずか1000字のものです——どんどんご投稿下さるようお願い申し上げます。

（萩原弥四郎）